

428

掌蹠膿疱症に合併する骨病変の検討
伊藤秀臣、日野恵、山口晴司、大塚博幸、檀芳之、
才木康彦、太田圭子、尾藤早苗、増井裕利子、
池窪勝治（神戸市立中央市民病院、核医学科）

掌蹠膿疱症に sternocostoclavicular hyperostosis などの骨病変が合併することはよく知られている。今回我々は骨シンチグラフィにて骨病変のみられた症例について retrospective に検討した。対象は男性 4 例（37～57 才）、女性 10 例（48～77 才）であった。骨シンチグラフィの施行理由は、本症における骨病変検索目的が 6 例、前胸部の腫脹・疼痛 4 例、悪性腫瘍の転移検索目的 2 例、その他 2 例であった。14 例中 13 例で胸鎖肋骨関節に異常集積が認められ、10 例は両側性であった。5 例では、脊椎でも集積があり、四肢、骨盤関節で集積のあるものもみられた。骨シンチグラフィは本症の診断及び病態の把握に有用であると考えられた。

429

骨腫瘍における Tl-201 シンチグラフィの臨床的検討

今井幸子、西村幸洋、大倉 享（奈良県立三室病院 放）
今井照彦、佐々木義明、真貝隆之、大石 元、
打田日出夫（奈良医大腫放・放）

骨腫瘍における Tl-201 シンチグラフィの臨床的有用性について検討した。単純撮影で骨腫瘍の疑われた 28 例を対象とした。集積は 5 段階の視覚評価で行い、骨肉腫については腫瘍/正常組織集積比 (T/N 比) も検討した。

Tl-201 シンチグラフィは、悪性群の 80% (骨肉腫では 100%) に異常集積を認めたが血流の豊富な良性腫瘍にも一部集積した。また、T/N 比の推移は、骨肉腫の化学療法に対する反応性の予知と治療効果判定に有用であった。

Tl-201 シンチは骨腫瘍の良悪の鑑別ならびに治療効果の判定に有用と思われるが、良性腫瘍でも血流の豊富な腫瘍には Tl-201 の集積がみられ注意を要する。

430

軟骨肉腫の骨シンチグラフィ像
松本誠一（癌研整外）、小泉満、野村悦司、山田康彦
（癌研アイソトープ）

軟骨肉腫は、骨肉腫に次いで頻度の高い骨原発悪性腫瘍である。軟骨肉腫における骨シンチの意義について検討を加えた。症例は、当科にて治療した 57 例である。結果：中心性の軟骨肉腫では、髄内の広がり一致して高い集積を認めたが、末梢性軟骨肉腫では腫瘤部の集積は、軟骨内骨化の程度に一致しており、骨化の認められない部位における集積はごくわずかであった。従って、全体が myxomatous で骨化をほとんど伴わない再発腫瘍においては、骨シンチでの経過観察は全く無意味であった。また、骨シンチ像から Grade I 軟骨肉腫と軟骨腫との鑑別も困難であった。しかし、淡明細胞型軟骨肉腫の 1 例で skip meta が骨シンチにて描出されており、今後とも術前に欠かせない検査と思われた。